



化石の寝言

東大名誉教授 田中館 愛 橘

※手元の資料の中から、標題に掲げたようなタイトルの文を見つけたが、どなたの作かわからない。前書きのような所には「…麗らかな春の土曜日（昭和27年）記者は今年満95才になる田中館愛橘先生を世田谷経堂のお宅に訪ねて半日を過ごした…」。

白髪紅顔の先生、この日甚だ元気に見えた。机の前に腰掛けて語る姿はとても95才にはみえない。今でも、ローマ字論者の先生は欧文タイプを自ら叩き、外国語もメガネ無しで読むという。ただ、少々耳が遠くなられて会話がややしにくい。『この間、尾崎さんの危篤が伝えられた時に、某紙の記者がきて、尾崎さんについて、語れというので、思い出話を2,3話したところ、尾崎さんは病気が良くなってしまった。その前にも本多光太郎君が危なくなった時も、私は思い出を語ったがやはり回復してしまった。私が話をする、と、妙に皆回復して丈夫になるようだね。尾崎さんとは、明治中頃からの知り合いで、一緒にヨーロッパへ旅して奥さんのお世話にもなったりした。

尾崎さんについてこんな話がある。尾崎さんが文部大臣になった時、明治天皇が「教育はどうするか」と御下問になった。尾崎さんが「教育勅語に従いました」とお答え申し上げた。すると天皇が、あれは10年も前のものだがあれでいいか」と仰せられ、尾崎さんは只頭を下げるばかりだったそうだ。勿論、この重大問題に即答出来るものはあるまい。明治天皇は10年はすでに過去とお考えであった。尾崎さんも今はローマ字論者だが、国字論者であった頃、私は「大学の学生はもう卒業論文をローマ字で書いています」と話したら、「それを受理しますか？」という。私は「卒業論文は事柄を知っているかどうかで問題で、どんな文字で書かれようと問題ではないでしょう」と言ったことがある。

とにかく、尾崎さんや本多君の話を私にさせるのは、同じように長生きをして、同じ時代をあゆんできたからだろうな』

——こんな調子で語り続ける先生であった。以下は先生に聞いた健康法や、その他の書き物から抜き集めたものである。

—— 記者 ——

…とあるだけで、どちらのどなたか皆目検討がつかないのですが、以下何回かにわたって本会報に抜粋で紹介させて頂きたいものとお願ひ申し上げます。

1. 鬼と仏のごもくずし

キューリーやニュートンのような人ばかりだったら、世の中はどんなに楽しかろう。実はこういう心持ちの人はどこにでもいて、ささいながら魂の取引を行い、恩に報いたりあわれみを施したりしているが、こういう人に限って世間に現れることを避けている。彼等が如何に経済の苦しみを和らげているか知れない。しかし、これと反対に悪いことばかり狙って、世に害を流す人も大勢いる。つまり世の中は「鬼と仏の五目ずし」だ。しかし、人間の本性に、善に進む種根がある以上、いつかは「仏」の方が殖えて。「鬼」の方は、無くなっていくだろう。

2. 紙幣何物ぞ

第1次世界大戦の後、ドイツは金が足りなくなって10ペニヒの札を作った。当時の日本の金で5銭。それが間に合わなくなって、どんどんだし続け、遂に1枚で1万億のマルクの札を出した。この札は当時日本の金で1円50銭位の価値しかなかった。

しかし、その後 Rentenmark というものを作った。その2マルクが日本の1円の値を持つに至った。何がこのような値を出したかという、ドイツの技能技術を抵当にしたからで、金や銀がそうさせたのではない。この当時1923年、私はドイツにおいて、有名な物理化学者ネルンスト教授に招かれ、私の知り合いも招かれ席を共にした。その時ドイツの金に困る話が出たから、私はネルンスト氏に「貴方のような物理化学者が金などで苦しむのが分からない。金は何物です？ 原子核69のグリルに電子がうごきまわっているのではないか。その隣に原子核80の水銀がある。この80から一つの核を叩き出せば金になる。貴方は何故それをやらぬか？ そうして出来た金をどっさり積んで、賠償を求める連合国に「これをお持ちください」といったら、重くて持っていくに困るだろうと言った。ネルンスト氏「いやそれはもう考えた。がそれにはどうしても百万ウォルト以上なければ出来ない。それを持ち耐える材料を考えても、なかなか出来ない」という。私は「それは入れ物無しでやる工夫はないものか」と言い其の場の笑い話になった。

その翌24年、私は英国の故ロード・ケルビン先生誕生百年の記念会に、わが学術研究会の代表で行った。一夕、故先生の門下生であったサー・ジェムス・ヘンダーソンが門下生5、6名と夕飯に招いてくつろいだ。雑談に乗って私は前年ネルンスト氏と話した金の人造談を持ち出し、「どうだ。今の経済会は金か銀でなければ成らぬように喧しくいうが、一つやってみたらどうだ」金持ち達がまごついて「面白かろう」というと、列席のカーバー君が早速「や～田中館、我々の言うバウンドシルリングというものは、金でも銀でもないんだ。我々英国人は「イエス」と言えば必ずそれを実行する。これが、バウンドシルリングなんだ。「金でも銀でもないんだ」と気炎を上げた。成る程そういえばそうかしらんが、5ポイント金貨で渡すと書いてある紙幣を、銀行へ持って行って金貨を求めても、それを何に使う、何のようがあるといってなかなか金貨をくれないと聞いた。これがつのり重なればマルクのようになるだろう。

紙に印刷すれば、何億の金でもできる。その値を出すものは何かといえば、つまり国民の知能技能である。だから空業即事業で、今まで不完全だったこの繋がりを、本当に理解して内部の泥仕合を消滅しなければ真の復興は出来ない。

孟子は「田野開けず、貨財聚らざるは、国の害に非ず、上に礼無く下に学ばなければ、賊民興り国亡ぶ」といった。今の言葉で政府に秩序無く、国民に学力がないならば、国は乱れ亡ぶということだ。

3. 道徳と経済

こういう道徳と経済のことを考えると、すぐ英国にいたときのことを思い出す。英国を旅行して誰でも気が付くことは、手荷物の合い札、チッキのないことである。どこの駅でも、手荷物にただ先の駅の名前を刷った札をはるだけで、その場所へ着けば、手荷物を皆ホームにさらけ出して、それぞれの持ち主が持っていくのに任せておくが、これで間違いがないのだ。

グラスゴーにいた時、休養で切符を買わずに汽車に乗り込んでグラスゴーの町中に行ったことがある。駅の出口で、「切符を買わずにきました」と言うと、「どこから乗った」と聞く。「パルチックから」「2ペンス」「いや、2等に乗った」「じゃ3ペンス」という。これらをみても、人は嘘はいわないものという建前で、すらすらと日頃の仕事を片付けていることが分かる。日本では無切符の場合なかなかこうはいかない場合が多い。

だが、一体道徳も経済も、適者生存で発育するわけだ。よく物語などにあるような、実際出来そうもない行いよりも、毎日のすること成すことの方が大切で、普段の行いがよくてこそ、非常時に善い行いも出来るのだ。

この間、水路の記念雑誌にも出したが、1924年、オスローの図書館で、自分の書いた本を見たとき、正誤がみな赤インキでいれてあるものをみて赤面したことがある。正誤の間違いで大変な事件を起こした事例も少なくない。日本の数百千の図書館中、どこの図書館がこのような親切をしているだろう。こういう人知れない毎日の親切が、大きな学問も国の富も生む地盤ともなるのだが――

―― 以下次号へ ―

第 48 回 田中館博士記念

児童生徒化学研究発表会 終わる

11年2月2日、二戸市シビックセンターを主会場に、標記の発表会開催され、最優秀賞者は次のとおりでした。優秀賞は、紙面の都合で割愛させていただきます。

◎最優秀賞 ※1年生は該当者無し

2年	いろいろなものを水にとかしてみよう	(伊保内小)	尾友	快晟	
3年	「ミクロ」のせかい	(一戸小)	坂本	芽	
4年	ハウセンカの観察と実験	(一戸小)	田村	美音	
5年	もののうきしずみの実験	(一戸小)	山火	沙知	
6年	光の研究 Part 2	(福岡小)	斗米	理実	
6年	空気中の酸素について	(金田一小)	山本	綾乃	
中学生	干しリンゴの研究 (共同研究)	(福岡中)	牛間木一八	中嶋 琢郎	
			槻館 祐貴	日向 宥敬	

永田先生の手記から

田中館博士がお亡くなりになったとき、東大工学部地球物理学教室にいらした永田先生が寄せられた一文が見つかりました。田中館博士の業績に種々触れられた後に、ご自分の信条を吐露された部分が強く心に残りましたのでご紹介いたします。

——学会の度ごとに聞く先生のお話は実に堂に入ったものであり、ユーモアたっぷりの名演説であった。しかも、最近の演説には、必ず上品なオチがついて、満場哄笑の内に終わるのが常であった。しかも、アト味として若い学徒の心に仄々としたものが残るのであった。

先生は確かにお偉いかたであった。でも私には、それよりもお会いして、嬉しいお話を聞かせていただき、安心して甘えさして下さった先生として、もっともっと身近な方として——というのが本心であった。先生のお薦め上手にツイ酔わされて、思い出すままの歌を歌い、時には怪しげなダンスさえ踊った私達である。また、先生の神楽歌なるものも聞いたことがある。いつか本誌に出た座談会で、先生と武藤博士を囲んだ時も、一番飲まれたのはたしか先生であった。——その先生は、すでにおわしまさず——。

お年に不足はがないと言いつつも、やはり、やはり寂し過ぎる——。

会報前号 (46号) の訂正について

前会報の 1 ページの博士の和歌献詠の記事につきまして、大変恐縮ですが訂正させて頂きたいと存じます。

博士が、昭和21年11月10日に小保内くら氏（稲荷神社宮司 道彦氏の祖母）に贈った「花咲かば……」に対するくらの返し歌「花咲かば……」がかなり年月が経ってから発見されたので、いつ返されたか不明と申し上げましたが、これが誤りでございましたので訂正させて頂きます。11月10日の朝に贈られ、博士が東京に出立する前に。言わば反射的に「返し歌」をされたということが真相でございました。

その後の歩み

- 平成22年 9月12日 ※第42回県立病院医学会総会で田中館博士についての特別講演（会長）
平成22年 9月13日 ※ローマ字書道コンクール審査会
平成22年 9月13日 ※ローマ字書道コンクール作品展示（市民ホール 月末まで）
※記念科学館展示替
平成22年 10月16日 八戸市自由大学で田中館博士についての講演（会長）
平成22年 10月 8日 資料調査委員会（於．シビックセンター）

~~~~~あ と が き~~~~~

- * 早いもんです。じき先頃新年を迎えたばかり一と思っておりましたが、早1ヶ月が経ってありました。昨年、クリスマスイブに雪景色をもたらしてくれた雪が根雪となり、暮れから正月にかけて猛威を奮ってくれました。あたたかも、昨年の猛暑に対抗するかの如くに寒気をも運んでくれたようです。
- * 指折ってみましたら、愛橘会が発足してから25年目を迎えておりました。これは、私も皆さんも25オトシが増したぞ…という事です。自覚症状はありませんが、数字が明確に語っています。（悪しからず、たまたま私がトシ男なもので、少々くどくなったかも…）
- * 訃報です。故 荒谷 拓雄 氏（10月）荒谷さんは、会の発足当初から物心両面にわたり種々ご協力を賜りました。ここに感謝と共に心からのご冥福をお祈り申し上げます。

《会報のタイトルについて》

- * 写真は昭和 19 年 4 月、文化勲章受章の時のものです。
* 氏名、サインとも博士の自筆であり、サインは絵やローマ字の書き物をなされた時に主として記しており、両方とも印鑑にしているのも有ります。

《会報の発行について》

- * 年 2 回発行 * 編集者 佐藤綾夫（事務局長）

《発行所》 田 中 館 愛 橘 会

〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡55
二戸市シビックセンター内 ☎0195-25-5411
F 0195-23-3548
(振替口座) 02350-8-18841

《印刷所》 沢 倉 印 刷 株 式 会 社

〒028-6101 岩手県二戸市福岡字城ノ外38 ☎0195-23-3107